

開拓二世の体験を語り継ぐ

「岩手戦後開拓物語」を開催 県開拓振興協会

(一社)岩手県開拓振興協会(野原修 理事長)は11月8日、盛岡市の「ホテル大観」で公益事業の「第7回岩手戦後開拓物語」を開催した。開拓者から幾多の苦難を乗り越えた体験を語り継ぐと、冒頭、野原理事長が挨拶を述べた。開拓者から幾多の苦難を乗り越えた体験を語り継ぐと、冒頭、野原理事長が挨拶を述べた。開拓者から幾多の苦難を乗り越えた体験を語り継ぐと、冒頭、野原理事長が挨拶を述べた。



第7回岩手戦後開拓物語



小野まり子さん

昭和24年、滝沢市(旧川)で。昭和20年に分村計画が決定。昭和22年、同村出身者ら50戸が滝沢村に入植しました。戦後開拓は、食糧難や引揚者の仕事不足を解消するための国策でした。入植者の親の多くが、土地を借りて「炭焼き」で生活していました。水との闘いで苦勞しましたが、自分の土地を持てた地へのヒューム管が途中に入ったのです。私が物心ついた時、周りは松林でした。シメジメした湿地帯で、両親は毎日毎日、開墾。木の根を掘り起こし、燃やしました。開墾が進むと、11戸が協力して雑穀や野菜を作付けし、共同で出荷しました。小学校に入学するまでランブ生活でした。3、5歳の頃、暗くなると、ランブの元で父が様々なことを話してくれました。貧しいけれど心は豊かでした。道路もない、電気がない、水もない。父が何カ所も井戸を掘って、ようやく飲み水を得ました。鳥の海開拓は、金ヶ崎町の西側に位置する駒ヶ岳の麓です。昭和22年に11戸が入植。ほとんどが地元の次男、三男でしたが、現在の奥州市水沢からも三戸入植しました。私の両親も水沢です。満州からシベリアに抑留されていた父が戻り、開拓

昭和24年、金ヶ崎町生。鳥の海開拓は、金ヶ崎町の西側に位置する駒ヶ岳の麓です。昭和22年に11戸が入植。ほとんどが地元の次男、三男でしたが、現在の奥州市水沢からも三戸入植しました。私の両親も水沢です。満州からシベリアに抑留されていた父が戻り、開拓



深澤幸雄さん

昭和24年、滝沢市(旧川)で。昭和20年に分村計画が決定。昭和22年、同村出身者ら50戸が滝沢村に入植しました。戦後開拓は、食糧難や引揚者の仕事不足を解消するための国策でした。入植者の親の多くが、土地を借りて「炭焼き」で生活していました。水との闘いで苦勞しましたが、自分の土地を持てた地へのヒューム管が途中に入ったのです。私が物心ついた時、周りは松林でした。シメジメした湿地帯で、両親は毎日毎日、開墾。木の根を掘り起こし、燃やしました。開墾が進むと、11戸が協力して雑穀や野菜を作付けし、共同で出荷しました。小学校に入学するまでランブ生活でした。3、5歳の頃、暗くなると、ランブの元で父が様々なことを話してくれました。貧しいけれど心は豊かでした。道路もない、電気がない、水もない。父が何カ所も井戸を掘って、ようやく飲み水を得ました。鳥の海開拓は、金ヶ崎町の西側に位置する駒ヶ岳の麓です。昭和22年に11戸が入植。ほとんどが地元の次男、三男でしたが、現在の奥州市水沢からも三戸入植しました。私の両親も水沢です。満州からシベリアに抑留されていた父が戻り、開拓

昭和24年、滝沢市(旧川)で。昭和20年に分村計画が決定。昭和22年、同村出身者ら50戸が滝沢村に入植しました。戦後開拓は、食糧難や引揚者の仕事不足を解消するための国策でした。入植者の親の多くが、土地を借りて「炭焼き」で生活していました。水との闘いで苦勞しましたが、自分の土地を持てた地へのヒューム管が途中に入ったのです。私が物心ついた時、周りは松林でした。シメジメした湿地帯で、両親は毎日毎日、開墾。木の根を掘り起こし、燃やしました。開墾が進むと、11戸が協力して雑穀や野菜を作付けし、共同で出荷しました。小学校に入学するまでランブ生活でした。3、5歳の頃、暗くなると、ランブの元で父が様々なことを話してくれました。貧しいけれど心は豊かでした。道路もない、電気がない、水もない。父が何カ所も井戸を掘って、ようやく飲み水を得ました。鳥の海開拓は、金ヶ崎町の西側に位置する駒ヶ岳の麓です。昭和22年に11戸が入植。ほとんどが地元の次男、三男でしたが、現在の奥州市水沢からも三戸入植しました。私の両親も水沢です。満州からシベリアに抑留されていた父が戻り、開拓

家族経営協定締結が年々増加

全国で5万7千戸 現 3月31日 在

農水省によると、18年 3月31日現在の家族経営協定締結農家は全国で5万7605戸となり、前年比450戸(0.8%)増加した。12年に5万戸を突破して以降、年々増えている。その役割や労働時間、労働報酬や労働時間、労働

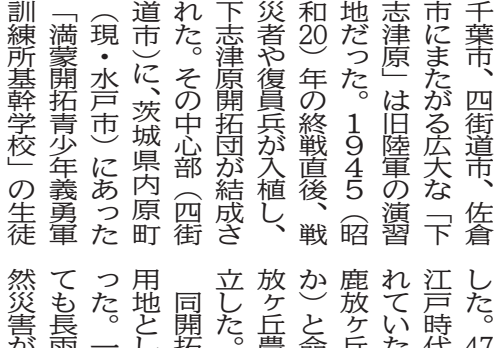
取り決め内容	2017年 (複数回答)
農業経営の方針決定	93.3%
労働時間・休日	92.4%
農業面の役割分担 (作業分担、簿記帳等)	84.5%
労働報酬(日給・月給)	73.4%
収益の配分 (日給・月給以外の利益の分配)	67.8%
経営移譲(継承を含む)	57.4%
生活面での役割分担 (家事・育児・介護)	44.9%

報酬などの就業条件が曖昧になりやすい。家族経営協定は、めざすべき農業経営の姿や、家族が意欲的に働ける環境整備などについて、家族間で十分に話し合い、取り決める。文書により締結し、農業経営の改善につなげる。17年度の新規締結農家は1688戸だった。年度中に新規締結、または見直しなどで再締結した協定の取り決め内容は、「農業経営の方針決定」「労働時間・休日」「農業面の役割分担」などが多い(表)。締結農家を都道府県別にみると、北海道58

千葉県の戦後開拓地は、旧軍用地が多かった。千葉市、四街道市、佐倉市にまたがる広大な「下志津原」は旧陸軍の演習地だった。1945(昭和20)年の終戦直後、戦災者や復員兵が入植し、下志津原開拓団が結成された。その中心部(四街道市)に、茨城県内原町(現・水戸市)にあった「満蒙開拓青少年義勇軍訓練所基幹学校」の生徒拓は困難を極めた。災害克服のため、共同作業でかんがい施設や防風林などを設けた。51年には住宅を建設

「生命乃開花」

千葉県四街道市鹿放ヶ丘開拓



拓は困難を極めた。災害克服のため、共同作業でかんがい施設や防風林などを設けた。51年には住宅を建設



拓は困難を極めた。災害克服のため、共同作業でかんがい施設や防風林などを設けた。51年には住宅を建設

千葉県農林総合研究センター畑地利用研究室

春夏どりニンジン **べたがけ二重被覆で6月収穫**
トンネル栽培より省力的に

ニンジンのトンネル栽培は、設置に大きな労力とコストがともなう。冬季播種において、より省力的で低コストな栽培方法の開発が望まれている。

千葉県農林総合研究センター畑地利用研究室は、春夏どりニンジンでトンネル被覆を行わない栽培法(図)を開発した。通気性のある保温資材(不織布)をべたがけすることで、収穫適期は遅くなるものの、作業時間の短縮と資材費の低減を図ることができる。

栽培品種は、根部形状が良好で、抽台しにくい「翔彩」が適している。

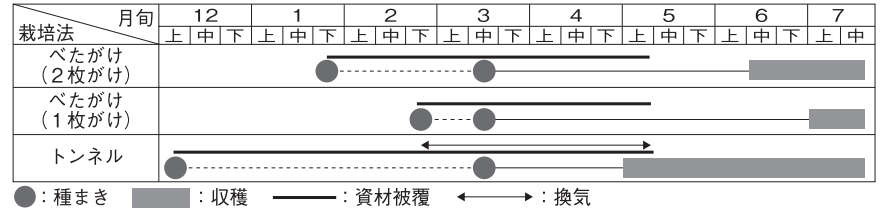
一重被覆の場合、2月下旬以降に播種すると抽台の発生が少なく、収穫時期は7月上旬からとなる。収穫適期は、

トンネル栽培に比べて、2月下旬播きで14日、3月上旬播きで7~14日、3月上旬播きでは7日程度遅くなる。

二重被覆の場合、出芽率及び抽台発生率を考慮した好適な播種時期が1月下旬以降となり、収穫は6月中旬から可能となる。収穫適期は、トンネル栽培に比べて、1月下旬から2月上旬播きでは14日、2月中旬から下旬播きでは7~14日、3月上旬播きでは7日程度遅くなる。

1作当たりの被覆に要する関連資材費の試算では、トンネル栽培が10a当たり5万115円、べたがけ一重被覆が同1万9800円、べたがけ二重被覆が同3万5250円となった。トンネル栽培より、

図 べたがけ栽培とトンネル栽培の栽培歴



それぞれ約60%、約30%低減した。

資材の被覆から除去までの作業時間について、県内の現地3農家への聞き取り調査から平均で約70%削減できることが分かった(表)。

留意点として、被覆資材の除去時期が遅くなると収量が減少し、抽台の発生率が高くなる傾向にある。さらに、地上部の生育量が増加して作業性が劣るので、いずれの播種時期でも慣行のトンネル除去と同時期

表 現地聞き取り調査による作業時間の比較

試験場所	作業内容	作業時間(人時/10a)	
		べたがけ	トンネル
八街市Aほ場	資材の設置	9.5	13.8
	資材の再被覆	3.2	-
	換気	-	7.0
	資材の片づけ	3.2	19.0
	合計	15.9(40)	39.8
八街市Bほ場	資材の設置	9.5	22.2
	資材の再被覆	3.2	-
	換気	-	11.1
	資材の片づけ	4.8	15.9
	合計	17.5(35)	49.2
八街市Cほ場	資材の設置	9.5	31.7
	資材の再被覆	-	-
	換気	-	-
	資材の片づけ	3.2	38.1
	合計	12.7(18)	69.8

注1) Aほ場とBほ場はべたがけ二重被覆、Cほ場はべたがけ一重被覆
注2) 資材の再被覆作業は、間引き後べたがけ資材を再被覆する際に要した時間
注3) 換気は、裾喚起で行った
注4) 合計時間のべたがけ区()内の数値はトンネル区に対する比率
図・表ともに千葉県農林総合研究センター畑地利用研究室の資料より

に被覆資材を除去する。

この栽培法に適する資材名など詳しい情報については、同センターのホームページを参照のこと。

「品質や付加価値に期待」約7割

環境保全型農業への農業者意識

農水省は11月20日、「環境保全に配慮した農業生産に資する技術の導入実態に関する意識・意向調査」の結果を公表した。農業者モニター1024人から回答を得たもの。

17年の農業経営で行っている栽培方法(複数回答、以下同)を聞くと、「慣行農業(地域で通常行われている農業)」が57.8%で最も多かった。次いで「環境保全型農業(化学肥料や農薬の使用に配慮した農業)」が41.4%、「エコファーマー」が24.6%と続いた。15~17年で最も売上げが大きい栽培方法も同じ順番だった。

以下は、15~17年で最も売上げが大きい栽培作物について質問した。なお、主なものの回答割合は、野菜・イモ類30.4%、果樹12.4%、茶7.0%など。

環境保全型農業への取り組みでどのような効果を期待するかは、「農産物の品質や付加価値の向上」が69.5%でトップ(図)。以下「水質の保全」が61.1%、「農業関連所得の向上」が54.6%と続いた。

また、今後最も取り組みたい栽培方法は、「環境保全型農業」が30.3%でトップ。次いで「慣行農業」が28.9%、「エコファーマー」が16.6%と続いた。

土壌分析を依頼している(外注含む)割合は、53.0%と半数越え。頻度は「数年に1度、代表的なほ場を選んで実施」が最も多い43.3%だった。

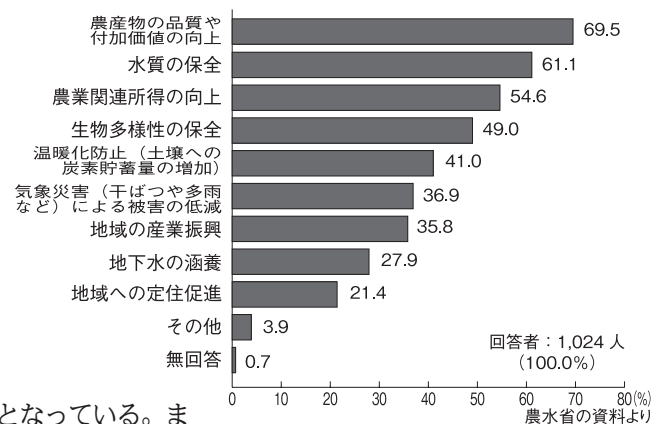
土づくり(土壌の改善)のために実施していることでは、「堆肥の施用」が52.3%でトップ。「堆肥を除く有機

質資材(植物残さ等)の施用」が49.4%、「化学性(pH等)改善のため改良土壌資材の利用」が44.8%と続いた。今後実施したいことも同様の順番となった。

化学合成肥料の使用を低減するため、土づくり以外で実施していることは、「有機質(動植物質のものに限る)肥料の施用」が49.3%と最も多く、今後実施したいことでもトップだった。化学合成農業の使用を低減するため

に実施していることは「機械除草(除草機や刈り払い機での除草)」が49.2%でトップ。以下「マルチ栽培」が30.0%、「温湯種子消毒(種子を温湯に浸し、附着した病害虫を駆除)」が24.7%と続いた。今後実施したいことも同様の順番となっている。また、使用低減のためにIPM(総合的病害虫・雑草管理)を「導入している」は13.7%に留まった。今後、「導入し

図 有機農業や環境保全に配慮した農業に取り組むことによって、どのような効果を期待するか(複数回答)



たい(または続けたい)」は29.2%である一方、最も多い回答は「分からない」で60.4%だった。

地下水・地中熱利用など追加

施設の省エネマニュアル改定

農水省はこのほど「施設園芸省エネルギー生産管理マニュアル」を改定した。13年版に、地下水・地中熱など自然エネルギーの利用に関する情報などを新たに盛り込んだ。内容を抜粋して紹介する。

地中深層の地下水や地中の温度は、年間を通してその地域の年平均気温程度で安定しており、冬期には外気よりも暖かい熱源となる。これらを活用した暖房の省エネ化を図るための技術として、ウォーターカーテン、熱交換器、地中熱ヒートポンプなどがある。

ウォーターカーテン

地下水を散水ノズルで温室内の内張カーテン上部に散水して被覆面の温度を高め、温室からの放熱を抑

制して温度を維持する技術(右図)。温度は冬でも14~17℃程度で、イチゴなど設定温度の低い作物ならば無加温での栽培も可能。単独で設定温度が維持できない場合にも、暖房機を補助的に使用することで温度維持ができる。

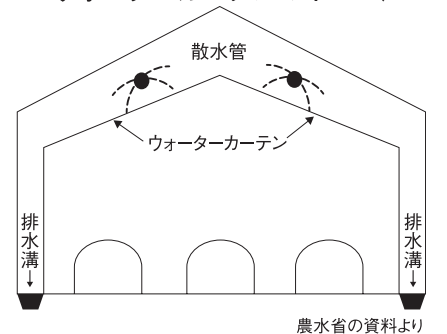
導入する場合、多量の地下水の汲み上げが必要であるとともに、室内が高湿度となることや、鉄分が多く含まれる地下水ではカーテンへ着色することなどにも注意を要する。

熱交換器

地下水などの熱を温風に変換する設備。一般的な温度の地下水では、燃油暖房機と組み合わせて利用することで、燃油使用量の軽減が期待される。

温泉水であれば、幅広い温度設定の作物で利用できる。

ウォーターカーテンのイメージ



地中熱ヒートポンプ

地下水または地中の熱を熱源としたヒートポンプ。デフロスト(除霜)運転が発生しないことから、運転コストを抑えられる。夏季には、効率的な冷房にも活用できる。

一方、井戸の掘削や熱交換器の埋設などの土木工事が必要なため、導入コストは高い。

なお、マニュアルは同省ホームページから見ることができる。付属の「生産管理チェックシート」も活用して、栽培方法に適した省エネ対策を講じることを勧めている。

密閉状態続かぬよう注意

豚舎の寒冷対策

豚は寒さに弱く、気温が低下すると下痢や呼吸器病などの疾病が深刻化することがある。冬季における豚舎の寒冷対策について紹介する。

豚舎は、すきま風の防止や適切な保温などの対策を徹底する。ムラがないように温度を管理し、乾燥しすぎない

ように湿度は60～80%を保つ。寒風の侵入防止には、扉へのくぐり戸の設置、透明ビニールのノレンを下げるなどが有効。カーテン内側にビニールシートを貼り付けると空気層ができ、断熱効果が高まる。カーテンの下端は、豚房床よりも下に位置するように調整する

と、すきま風を減らせる。寝床や豚房周囲をコンパネやベニヤ板で覆うことで、保温効果が高まる。

スノコ式豚舎では、除ふんピットからの冷気侵入防止に、排泄口にカーテンを下げるなど工夫する。また、床下からは冷気が上昇し、豚に持続的に寒さが加わるため注意する。

防寒に重点を置くあまり豚舎の密閉状態が続くと、溜まったアンモニアガスが原因で呼吸器病の発生リスクが増加する。天候の良い日に、室温を確認しながら換気を行うことも大事であ

る。この時、カーテンや換気扇を調整して、豚舎内の温度が下がりすぎないように注意する。

特に子豚は寒さに敏感なので、温度管理には注意する。新生子豚は保温箱の設置のほか、床に稲わらなどを敷く。出生後は事故が多く、分娩直後から生後1週間は30℃を目安とする。生後2～3週間では25℃、2～3ヵ月は20℃を維持できるよう心がける。子豚舎から肥育舎への移動時や、気温・湿度の急激な変化は、疾病の発生や飼料効率に影響するので留意する。

「日本の牛乳は品質良い」8割以上

牛乳の購入意識調査

(株)ネオマーケティングはこのほど「牛乳の購入意識に関する調査」の結果を公表した。全国の20～69歳の男女1000人を対象とし、今年10月にインターネットで行ったもの。

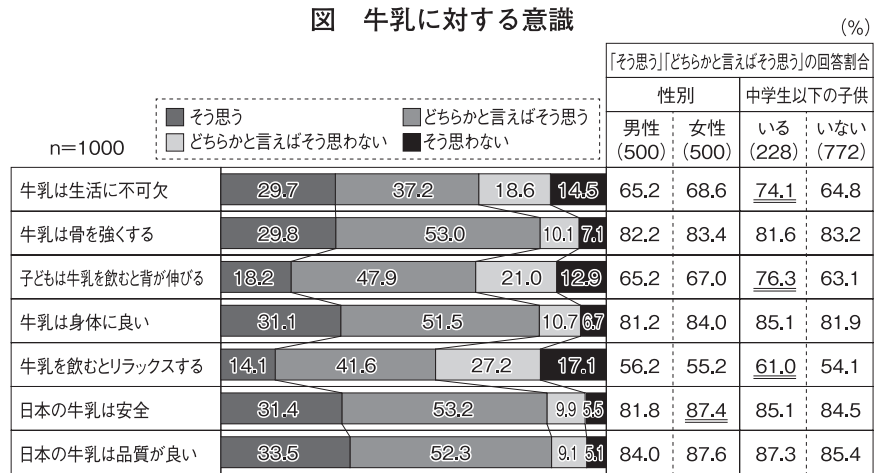
牛乳を購入するか聞いたところ「ほぼ毎日」が7.0%、「週2～3回程度」が19.4%、「週1回程度」が25.1%と、週1回以上購入する人が約半数の51.5%を占めた。一方、「ほとんど購入しない」は18.2%で約2割となっている。

月2～3回以上購入する人(59.3%)の1週間当たり購入量は、「1～2L未満」が最も多く45.7%だった。次いで「1L未満」が30.2%、「2～3L

未満」が11.3%と続いた。「2L未満」の回答が、購入者の4分の3程度を占めている。また、購入する際に最も重視することでは「価格」が32.9%とトップ。以下「品質(安全性)」が26.6%、「味」が18.0%と続いた。

全員の牛乳に対する意識について、最も「思う」が多かったのは「日本の牛乳は品質が良い」で85.8%だった(図)。次いで「日本の牛乳は安全」が84.6%、「牛乳は身体に良い」が82.6%などとなっている。

食や牛乳の供給に関しての考えでは、「日本の酪農や酪農家を応援したい」と思う人が最も多く85.6%。以下「食品の安心・安全を維持するのはコ



ストがかかるものだ」が85.2%、「現状より食品の価格が安くなるより安心・安全を維持してほしい」が83.6%などと続いた。

もし店頭で外国産が売られていた場合、国産とどちらを購入したいかでは、「多少高くても国産」が54.7%、「価格が同じなら国産」が38.6%で、合わせて9割以上が国産を優先する意向を

示した。また、国産優先の人に牛乳(紙パック・1L)の値上げはいくらまで許容できるかでは、「20円くらいまで」が28.3%で最も多かった。次いで「10円くらいまで」が25.4%、「30円くらいまで」が18.4%と、上位3項目で7割以上を占めた。なお、「100円以上の値上げでも国産を買いたい」は4.0%だった。

搾乳牛1頭当たり2.5%増

17年度 牛乳生産費

農水省がこのほど公表した「17年度牛乳生産費」によると、搾乳牛1頭当たりの全算入生産費は75万7043円で、前年より2.5%増加した。

物材費が70万8017円(前年比4.7%増)、労働費が16万9255円(0.7%増)となっており、費用合計は87万7272円(3.9%増)だった。

物材費の内訳をみると、乳牛償却費が16.4%増、農機具費が15.2%増と、ど

ちらも前年より1割以上の増加。一方、獣医師料及び医薬品費は1.2%減少した。

生乳100kg当たり(乳脂肪分3.5%換算乳量)の同生産費は7972円で、前年に比べ2.4%増加した。

1経営体当たり搾乳牛飼養頭数は55.5頭で、前年より2.8%増加。1頭当たり投下労働時間は104.02時間と、1.6%減少した。

12月10日、岐阜県関市内の施設で飼養されているイノシシが豚コレラに感染していることが分かった。

同県では今年9月に豚で発生して以降、死亡または捕獲した野生イノシシから断続的に感染が確認されている。飼養豚ではこれまで、11月中旬に岐阜市営公園で2例目が、12月4日に美濃加茂市内の県畜産研究所で3例目がそれぞれ発生している。

特に、技術開発及び指導の基幹となる県畜産研究所での発生によって、繁殖豚・子豚合わせて約490頭が殺処分となり、県内養豚業への影響は極めて大きいとみられる。

県は、農家や関係各所に対して、農場の消毒や野生動物の農場への侵入防止など飼養衛生管理基準をのじゅん守に関する指導を改めて徹底することとしている。

岐阜県内、続発豚コレラ拡がる

年間12日以上利用、1.7ポイント増

酪農ヘルパー利用実態

表 1戸当たりの年間利用日数別構成比 (17年度)

項目	1～5日	6～11日	12～23日	24～35日	36日以上	(参考)12日以上
全 国	16.3%	16.9%	31.6%	16.9%	18.3%	66.8%
北 海 道	20.4%	18.2%	28.3%	13.7%	19.4%	61.4%
都 府 県	13.1%	15.7%	34.2%	19.5%	17.5%	71.2%

(一社)酪農ヘルパー全国協会の資料より

(一社)酪農ヘルパー全国協会はこのほど、「酪農ヘルパーの利用実態」を公表した。全国のヘルパー組合数(18年8月1日時点)は、288組合となり、前年に比べ7組合減少した。北海道は86組合で前年と同数、都府県は202組合で7組合減だった。

利用組合の活動範囲内の酪農家は1万3953戸で、1利用組合当たり48.4戸。カバー率は89.0%と前年より0.1ポイント増加した。

利用組合参加戸数は、1万1171戸で1利用組合当たり38.8戸。北海道は143戸減、都府県は272戸減となっている。全酪農家戸数(18年2月1日時点)に対する参加率は、80.1%と前年より0.4ポイント増加した。

17年度の利用状況をみると、利用戸数は9775戸と前年より539戸減少。北

海道は140戸、都府県は399戸それぞれ減少している。1戸当たりの平均利用日数は22.78日と0.34日増加。北海道は0.04日減少した一方で、都府県は0.63日増加している。総利用日数は22万2692日で8791日減少。北海道は3356日、都府県は5435日それぞれ減少している。病気・事故などの傷病時利用の対象となったのは2002人で、前年を135人下回った。

ヘルパー利用酪農家全体のうち、年間12日以上利用している割合は66.8%で、前年より1.7ポイント増加した(表)。北海道は0.7ポイント増の61.4%、都府県は2.5ポイント増の71.2%だった。

全国のヘルパー職員数は1888人と、前年より22人減少。その内訳は、専任ヘルパー1062人、臨時ヘルパー826人となっている。

肥育牛全品種で素畜費増加

17年度肉用牛・肥育豚生産費

農水省はこのほど、「17年度肉用牛・肥育豚生産費調査」の結果を公表した。1頭当たり資本利子・地代全額算入生産費(以下、全算入生産費)は、全畜種で増加した。特に肥育牛では素牛価格の高値が依然として生産者の大きな負担となっており、繁殖基盤の強化が求められる。

乳用雄肥育牛

1頭当たり全算入生産費は、53万1513円(前年度比5.2%増)となった。素牛価格の上昇により、素畜費が24万6398円(20.7%増)と増加したことなど

が影響した。1頭当たり販売価格は49万2924円(1.0%減)、1経営体当たり販売頭数は120.5頭(5.3%増)、1頭当たり投下労働時間は15.37時間(7.7%減)となった。

交雑種肥育牛生産費

1頭当たり全算入生産費は、81万8456円(前年度比6.4%増)となった。素牛価格の上昇により、素畜費が41万6488円(12.2%増)と増加したことなどが影響した。

1頭当たり販売金額は76万8503円

(7.3%減)、1経営体当たり販売頭数は83.5頭(0.4%増)、1頭当たり投下労働時間は25.16時間(0.8%減)となった。

肉専用種子牛

1頭当たり全算入生産費は、62万8773円(前年度比4.0%増)となった。飼料価格の上昇により、飼料費が22万8586円(4.0%増)と増加したことなどによる。

1頭当たり販売価格は75万4495円(3.8%減)、1経営体当たり販売頭数は11.3頭(1.8%増)、1頭当たり投下労働時間は127.83時間(0.9%減)となった。

肉専用種去勢若齢肥育牛

1頭当たり全算入生産費は、125万3930円(前年度比9.3%増)となった。

素牛の価格上昇により、素畜費が78万702円(16.6%増)と増加したことなどが影響した。

1頭当たり販売金額は129万8384円(1.2%減)、1経営体当たり販売頭数は42.5頭(8.1%増)、1頭当たり投下労働時間は49.82時間(4.3%減)となった。

肥育豚

1頭当たり全算入生産費は、3万2760円(前年度比2.1%増)となった。飼料価格の上昇により、飼料費が2万541円(1.4%増)と増加したことなどによる。

1頭当たり販売価格は3万9387円(5.9%増)と増加した。1経営体当たり販売頭数が1580.8頭(1.1%増)、1頭当たり投下労働時間は2.71時間(0.4%減)となった。

17年度 肉用牛・肥育豚生産費

区 分	乳用種雄肥育牛(1頭当たり)		交雑種肥育牛(1頭当たり)		肉専用種(1頭当たり)				肥育豚(1頭あたり)	
	金額(円)	前年比(%)	金額(円)	前年比(%)	子 牛		去勢若齢肥育牛		金額(円)	前年比(%)
					金額(円)	前年比(%)	金額(円)	前年比(%)		
物 財 費	503,803	5.9	767,256	7.3	390,050	3.2	1,165,338	10.5	28,619	2.4
うち素畜費	246,398	20.7	416,488	12.2			780,702	16.6	31	55.0
飼 料 費	221,695	△4.4	298,304	1.4	228,586	4.0	306,403	0.5	20,541	1.4
労 働 費	23,926	△5.9	39,235	△1.0	185,902	1.4	76,059	△3.9	4,265	△0.4
費 用 合 計	527,729	5.3	806,491	6.8	575,952	2.6	1,241,397	9.5	32,884	2.0
生 産 費 (副産物価格差引)	523,459	5.4	800,730	6.8	551,108	3.4	1,231,811	9.7	32,001	2.1
全算入生産費	531,513	5.2	818,456	6.4	628,773	4.0	1,253,930	9.3	32,760	2.1

飼養管理強化で生産性向上

肉用牛増頭に向け繁殖基盤整備

関東農政局はこのほど、(一社)全国肉用牛振興基金協会とともに「関東地域肉用牛生産基盤強化推進シンポジウム」を開催した。肉用牛生産振興に取り組む現場からの事例発表を交え、肉用牛増産に必要なことを共有した。

冒頭、農水省生産局畜産部の大竹匡巳氏が情勢報告を行った。近年は肉食ブームであることから、牛肉の需要は増えている。しかし、輸入牛肉の比重

が大きく、17年は需給全体の約63%を占めている。安定して国産牛肉を生産できる環境が必要となる。まずは繁殖雌牛を増頭し、肥育農家が導入する素牛価格を押し下げることが重要。

長野県農政部園芸畜産課の山上怜奈氏が肉用牛の生産基盤強化のため県内で行った実証展示の結果を発表した。全て16~18年に行われたもの。全568頭の黒毛和種でゲノミック評価をして、

介して抗体を移行するのが有効。

②ほこりが立ちにくい敷料を使う

細かい素材の敷料が気管に吸い込まれると呼吸器病の原因になるため、ほこりが立ちにくいものを使う。敷料に含まれる粉じん・カビが原因となる場合もある。

③よく個体を観察する

日常的に個体観察を徹底し、食欲不振・発熱・発咳・鼻汁・呼吸数の増加などの異状を見逃さないようにする。また、冬場は牛舎を閉めきることが多いため、意識的に換気をしてアンモニアの発生を防ぐことも重要である。牛の状態を見て、離乳・移動・除角などのストレスのかかる作業は、日を分けて行うようにする。

育種価との相関を調査したところ、種雄牛で強い相関、繁殖牛で中程度の相関が認められた。

分娩監視装置は21頭に装着した。年1件は発生していた分娩事故が0件になり、生産性向上に役立った。夜間の見回りに係る労力も1頭当たり6時間

削減することができた。発情監視装置は30頭の牛に装着し、平均分娩間隔を34日短縮することに成功。妊娠頭数比率も実証前から14%増加した。事例紹介では日々の個体観察・飼料給与体系のじゅん守など日常から行える作業の重要性も改めて強調された。

年末年始に向け注意点確認

口蹄疫侵入警戒

口蹄疫は偶蹄類に感染するウイルス性の感染症。発症すると発熱やよだれ、口の中や蹄の付け根などに水ぶくれなどの症状がみられる。生産性が大きく低下し、最も恐れられている感染症の一つである。感染力が非常に強いウイルスであるため、予防が重要となる。

国内では10年の宮崎県以降発生が確認されていないが、韓国や中国を始めとする近隣の国で継続的に発生している。今年の10月にも中国で発生が確認された。毎年、年末年始・春節にかけてアジア圏からの訪日旅行者が増える。以下の点を徹底し、改めてウイルス侵入への警戒を強めることが必要である。

～畜舎管理のポイント～

○農場の出入り口に看板を設置するなどにより、関係者以外の立ち入りを制限する。立ち入り車両は消毒

する。
○畜舎に持ち込む物品の消毒を徹底する。畜舎の出入り口に踏み込み消毒槽などを設置する。専用の衣服や靴を使用する。

○野生動物の侵入を防止する。
○衛生管理区域の立ち入りに関する記録を作成し保管する。感染ルートをいつでも特定できるようにしておく。

～海外渡航・帰国後の注意～
○やむを得ない場合を除き、口蹄疫発生国へは渡航しない。渡航する場合、畜産関連施設には立ち入らない。

○帰国後は空海港の動物検疫所カウンターに立ち寄り、家畜防疫官の指導を受ける。

○帰国後1週間は衛生管理区域に立ち入らない。やむを得ず立ち入る場合には、髪洗・入浴、服を着替えるなど対策を取る。海外で使用した衣服や靴を衛生管理区域に持ち込まない。

子牛の異状と換気に注意

冬季の呼吸器病対策

冬は、子牛を中心に呼吸器病を起しやすい。重篤化・慢性化した場合、発症牛が死亡してしまう恐れがあるほか、症状が治まってもその後の成長など生産性に悪影響を及ぼすことが予想される。牛舎内の環境を整え、ストレスを軽減することが大切である。

①ワクチン接種を行う

発症してから治療を行うと費用がかかる。子牛へのワクチン接種はなるべく早くする。また、和牛繁殖では、母牛にワクチンを接種することで母乳を

畜産物需給見直し

牛枝肉

年末年始向け手当て後は、各品種の相場軟調か

11月の相場は、枝肉共進会の開催などもあり、強もちあいの展開となった。各品種で前月・前年同月を上回った。特に交雑種(F₁)の2等級は需要が強く、引き続き堅調だった。

【乳去勢】11月の東京市場乳去勢牛B2の税込み平均枝肉単価(速報値、以下同じ)は、1078円(前年同月比106%)となった。前月に比べ33円上げた。

農畜産業振興機構は、12月の乳用種(雌含む)の全国出荷頭数が2万6700頭(92%)と、大幅な減少を予測している。輸入量は総量で4万6800t(100%)と予測。うち冷蔵品は、豪州産の減少が見込まれることから、前年同月を下回る2万2600t(97%)の見直し。冷凍品は、米国産の大幅な増加が見込まれることから、前年同月を上回る2万4200t(103%)としている。

【F₁去勢】11月の東京市場F₁去勢牛税込み平均枝肉単価は、B3が1671円(前年同月比117%)、B2は1543円(131%)となった。前月に比べ、それぞれ75円、81円上げた。B2は8月から、前年を2割以上も上回って推移している。

同機構は、12月の交雑種の全国出荷頭数が2万3000頭(98%)となり、減少に転じると予測している。

【和去勢】11月の東京市場和去勢牛税込み平均枝肉単価は、A4が2652円

(前年同月比105%)、A3は2451円(111%)となった。前月に比べ、それぞれ126円、168円上げた。

同機構は、12月の和牛の全国出荷頭数が4万7000頭(102%)と、前月に続き増加を予測している。牛全体の出荷頭数は9万8200頭(98%)となり、前年同月を下回ると見込んでいます。

同機構は、10月から来年3月の出荷頭数見込みも発表。乳用種は前年同期比6%減、交雑種は前年同期並み、和牛は1%増、全体では1%減と見込んでいる。

12月は牛肉の最需要期で、堅調な相場展開が予想される。冷え込みが厳しくなったことで、鍋物需要が活発化する。年末年始向けの手当ても本格化する。各

品種の全国出荷頭数は減少が予測されており、11月の相場から1段高が予想される。ただ、既に高値となっている交雑種の2等級はもちあいか。年末年始向けの手当て後は、各品種の相場は軟調に転じるとみられる。

向こう1ヵ月の東京市場の税込み平均枝肉単価は、乳去勢B2が1000~1100円、F₁去勢B3が1650~1750円、B2は1450~1550円、和去勢A4が2650~2750円、A3は2450~2550円での相場展開か。

11月の子牛取引状況 (単位:頭、kg)

ブロック名	品種	頭数		重量		1頭当たり金額		単価/kg	
		当月	前月	当月	前月	当月	前月	当月	前月
北海道	乳去	654	670	291	293	270,130	263,181	928	898
	F ₁ 去	1,056	1,044	314	313	523,631	484,176	1,668	1,547
	和去	1,299	1,442	312	313	785,325	771,823	2,517	2,466
東北	乳去	1	-	265	-	130,680	-	493	-
	F ₁ 去	15	12	256	294	329,688	367,470	1,287	1,250
	和去	2,044	1,986	302	304	813,046	768,579	2,691	2,529
関東	乳去	37	25	284	239	263,432	224,423	926	938
	F ₁ 去	113	133	291	296	445,026	434,160	1,529	1,466
	和去	785	1,031	263	271	760,536	762,698	2,886	2,818
北陸	乳去	-	-	-	-	-	-	-	-
	F ₁ 去	-	-	-	-	-	-	-	-
	和去	72	-	264	-	799,695	-	3,030	-
東海	乳去	9	7	275	289	214,560	228,342	780	790
	F ₁ 去	79	84	289	306	434,036	421,958	1,502	1,379
	和去	445	252	266	259	781,731	733,774	2,937	2,832
近畿	乳去	-	-	-	-	-	-	-	-
	F ₁ 去	-	1	-	195	-	326,160	-	1,673
	和去	503	400	254	251	1,145,031	1,192,500	4,502	4,752
中国	乳去	54	61	265	282	229,000	223,737	863	794
	F ₁ 去	230	186	312	308	473,007	452,821	1,516	1,468
	和去	512	884	288	284	764,806	768,048	2,651	2,700
九州・沖縄	乳去	8	23	250	290	222,750	260,796	893	900
	F ₁ 去	398	400	307	312	477,644	444,306	1,557	1,425
	和去	8,840	7,118	290	292	819,695	798,235	2,828	2,734
全国	乳去	763	786	288	290	265,559	258,507	922	891
	F ₁ 去	1,891	1,860	309	311	497,816	465,242	1,611	1,496
	和去	14,500	13,113	290	292	820,559	796,982	2,830	2,729

注) (独)農畜産業振興機構の公表データを基に本紙集計、当月は暫定値。価格は消費税込み、重量・金額・単価は加重平均。-は上場がなかったことを示す。関東ブロックは山梨県、長野県、静岡県を含む。

生産費基礎に保証基準価格算定

肉用子牛補給金制度見直し

農水省は11月20日、肉用子牛生産者補給金制度の算定方式検討会を開催。同制度の発動基準である保証基準価格(以下、基準価格)の算定方式見直しについて、基本的な考え方をとりまとめた。算定は、生産費を基礎とすることが適当とした。現行より実態と合い、基準価格が引き上がる見込み。

検討会では以下のとおり、現状と改正の方向性が示された。

○基準価格は、輸入自由化前7年間の子牛の農家販売価格を基礎に生産コストの変化率などを乗じて品種ごとに算定している。制度導入時(1990年)は生産費調査の調査数や精度が不十分だったことがその理由。現在、同調査が充実していることを踏まえ、牛マルキン事業と同様に「支払利子・地代算入生産費」を基礎とすることが適当である。

○算定に用いる期間は、牛肉の生

産には周期的変動(キャトルサイクル)があるため、過去7年間とする。

○乳用種及び交雑種育成経営における直近の素畜(スモール)費が過去に例をみない高水準となっている。素畜費の算定は、過去一定期間(8年間以上)を考慮することで準化を図る。

○黒毛和種繁殖牛の飼養規模別みると、小規模層(9頭以下)が飼養戸数の6割強(飼養頭数では2割弱)を占めている。基準価格の算定では、小規模経営の実態を踏まえつつ、肉用牛生産の近代化を促進する方向に沿ったものとする。

○2年目以降は、生産額を基礎に算定された価格に、生産コストの変化率などを乗じて算出する。

食料・農業・農村審議会畜産部会で基準価格などが決まる。「総合的なTPP等関連政策大綱」に基づき、12月30日のTPP11発効に合わせて適用となる。

豚枝肉

年末年始向けで上昇も、小幅高にとどまるか

11月の東京食肉市場税込み平均枝肉単価は、上物が442円(前年同月比76%)、中物は401円(72%)となった。前月に比べ、それぞれ19円、30円下げた。出荷頭数が安定してきたことや、輸入冷蔵品(チルド)が依然として3万t/月台となっていることで需給が緩み、弱もちあいで推移した。

農水省の肉豚生産出荷予測によると、12月は149万2000頭(前年同月比102%、過去5年同月平均比100%)、来年1月は138万9000頭(100%、100%)と平年並みで推移する見直し。

農畜産業振興機構は、12月の輸入量

を総量で7万8300t(94%)と予測している。うち冷蔵品は、前年の輸入量が多かった反動で前年同月を下回るものの、底堅い需要を背景に、過去5年平均を上回る3万4900t(94%)と予測。冷凍品は、アフリカ豚コレラ発生による欧州産の減少などにより、4万3400t(94%)を見込んでいる。

気温の低下にともない、鍋物需要の増加が見込まれる。また、年末年始向けの手当てで、相場は上昇すると予想される。ただ、競合する冷蔵品の輸入量が安定しており、相場の上げは小幅にとどまるか。

向こう1ヵ月の東京食肉市場税込み平均枝肉単価は、上物が450~480円、中物は400~430円での相場展開か。

素牛



肥育牛出荷増加で引き合い強まり、高値展開か

【乳素牛】11月の乳素牛の全国1頭当たり税込み平均価格(暫定値)は、乳去勢が26万5559円(前年同月比119%)、F₁去勢は49万7816円(112%)となった(表)。前月に比べ、それぞれ7052円、3万2574円上げた。枝肉相場が堅調で、両品種とも3ヵ月連続で上げた。

年末年始の牛肉最需要期に向け、枝肉相場は堅調な展開の見直し。素牛の引き合いは引き続き強いと予想され、もちあいで推移か。

【スモール】11月の全国主要24市場の1頭当たり税込み平均価格(農畜産

業振興機構調べ、暫定値)は、乳雄が12万7553円(前年同月比107%)、F₁(雄・雌含む)は26万196円(115%)となった。前月に比べ、乳雄は107円上げの横ばい、F₁は8790円上げで一段高となった。

両品種の取引頭数は前年に比べ、減少傾向が続いている。今後も高値が継続するとみられる。

【和子牛】11月の和子牛去勢の全国1頭当たり税込み平均価格は、82万559円(前年同月比102%)となった。前月に比べ2万3577円上げた。枝肉需要入りで肥育牛出荷が進み、子牛の引き合いが強まった。

今後、空き牛舎への導入などにより、さらに小幅高の展開となるか。